



2009年度 第1号 12月18日発行

双方向 *East and West*

財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッション京都宗教学際研究所
(*Kyoto Interdisciplinary Institute of Religions*)

京都宗教学際研究所という活動

(財団理事) 内海 博司

(財) 基督教イーストアジアミッションと富坂キリスト教センターが2008年度から一体化され、財団、EMS, NCC 京都宗教研究所の3団体が正式に協力活動を始めたのは、2009年4月からですが、実は、8年程前から、EMS, NCC 京都宗教研究所と富坂キリスト教センターとは「一方向」ですが、宗教間対話学習(宗教を学ぶことが主眼ですが、禅仏教、阿弥陀仏教、神道、新宗教、日本のキリスト教などの講義と見学、実地体験等)の共催事業を実施していました。ドイツから来たキリスト教神学の研修生が、青森の恐山に行った素晴らしい異宗教体験から、「ヨーロッパから日本への一方通行ではなく、日本からヨーロッパへの研修生を是非迎えたい」という感想文(2003年12月「富坂便り」)を書いているように、当時から、「双方向」の活動が考えられていたのですが、現実味を帯びたのは「京都宗教学際研究所」として、財団の活動の三本柱として位置づけられてからです。

京都に在住している理事という理由で、キリスト教徒でなく仏教徒であり、生物学者である私が、「京都宗教学際研究所」の担当になりました。これまで当財団に関わった人達とは異質な者ですが、50年以上留学生関係のボランティア活動を続けています。この活動を通じて、異なる文化、宗教、習慣及び人種を異にする若者同士と一緒に食事を共にするという共同生活の中で、互いの違いを認識するという経験が、真の世界平和の出発点となることを確信するようになりました。

本研究所の活動の柱は、宗教間対話と書かれています。むしろより実践的な複数の宗教体験実習を通して、人類が共存できる道を探ることだと思っています。特に自らの宗教を極めようとする若い宗教人（例えば、神学生や仏教を学ぼうとする学生やお坊さん）が他の宗教（仏教、神道、キリスト教やイスラム教など）活動に関わり、この複数の宗教経験を通して己の宗教的限界を乗り越え、更に己の宗教に留まることなく、国際社会に貢献できるような宗教人を育成したいと思っています。

過去においても、現在でも、宗教間、宗教と無宗教間にさまざまな衝突が生じています。ここでいう無宗教という人達でも、自分の力を超えた存在に心を委ねるような場合もあるのも、良くも悪くも、未来を思索できる生物として進化したヒトの性（さが）かもしれません。もともと、キリスト教、イスラム教、仏教など、多くの宗教が生まれたのも、ヒトの力では逃れられない生老病死に直面することから生まれたものなのでしょう。日本でも世界でも宗教的な多様性が存在し、現在のようなグローバルな社会では、他の宗教や無宗教を避けて生きるこ

とは出来ません。

積極的な「双方向」の他宗教経験活動を通じて、お互いの宗教や文化や慣習を認めあう寛容性を身につけ、社会に、国際社会に貢献できる若手宗教人を育てることができればと思っています。



(下北半島の恐山で、イタコの口寄せを取材する研修生 2003年フィールドトリップ)

2008年度参加者

カルムバッハ (Alexander Kalmbach) 研修生からの手紙

2008年度は、ノルウエーからヘッグム牧師(Dr.Heggem)、ドイツからカルムバッハ研修生の2名だけでしたが、カルムバッハさんが次のような手紙を財団宛にくださいました。

「・・・NCC 宗教研究所の研修プログラムは非常に興味深いものがあります。全てのテーマに感謝しています。講義課題が充実しているので、多くのことを学んでいます。素晴らしい研究者と様々な課題について話し合うことが出来るのは大変楽しいですし、新しい観点を与えてくれます。このプロジェクトに参加しているノルウエーから来たヘッゲム牧師自身が大変学識豊かな方です。レップ教授や石川助手などはいつもわれわれのそばにいて、助言してくれます。しかし、このプログラムはフィールドトリップなしには完全だとは言えないでしょう。それらは様々な場所を見学する機会を提供してくれますし、様々な人々と出会い、彼らから学び、あるいは単純にただ静かに彼らとそこにいる機会を提供してくれるからです。書籍から何かを学ぶことも大事です。けれども、学んだ事を体験できるということが、それを理解するためには絶対に必要なことです。私は府上牧師に招待されまして、洛陽教会のバザーに出たり、礼拝に参加することが出来ました。そこで、私は心から歓待されました。皆さんがよそ者の私に示してくださった親切に、私は心ゆさぶられる思いでした。・・・

2008年11月10日 京都」

2009 年度プロジェクトに関する EMS (Evangelisches Missionwerk) からの手紙

ここ数年間、財団の富坂キリスト教センターを通して繰り返されて来た宗教・文化間国際交流ですが、公益法人化の流れの中で富坂キリスト教センター自体が財団の3事業部門のひとつに編成変えとなりました。それを機会に、財団と EMS,そして NCC 宗教研究所との関係を EMS のドレッシェー担当幹事が下記のように明確にして手紙をくださいました。

「例年のように、NCC 宗教研究所の「日本での宗教間研修プログラム (ISJP)」(Interreligioeses Studienprogramm in Japan) に、2009 年度、当方は5名を参加させる予定です。ドイツにおけるパートナーである EMS はその際、研修生の募集、研修、日本への派遣、帰国後のあなた方との経験の評価等を行います。今年はこの研修生に短期間の随行者 1 名を参加させる予定です。「宗教観研修プログラム」の講義カリキュラムやフィールドトリップや東京での立案実施は、NCC 宗教研究所の ISJP 運営委員会の責任でお願いします。財団が、財政危機にもかかわらず、宗教間の平和に貢献し、京都での財団宿泊施設および東京への研修旅行、経験交流、奨学金などを負担して下さることを感謝します。

ルツ・ドレッシェー 南西ドイツ福音主義教会宣教局 (EMS) インド・東アジア担当幹事
2009年5月15日」

ドイツからの研修生を迎えて

(担当主事) 鈴木正三

今年度の研修生は全てドイツからで、5名の研修生が今年9月16日から京都の別当町にある財団の宿舎と財団本部がある聖護院の京都「国際学生の家」に分かれて、来年2月半ばまで、日本の諸宗教を学ぶ研修をしている。12月には1週間フィールドトリップで東京の富坂キリスト教センターに来て、上富坂教会の宿舎をお借りして、そこから東京や鎌倉の宗教間対話のプロジェクトに参加する。日本の宗教や文化への関心は旺盛なもので、9月に来て12月には早くも宿舎の玄関に奇妙な盆栽がかざられていた。

6年前来た研修生の中に、予定の半年間の研修のあと、さらに1ヶ月間にわたって佐渡教会に滞在した若いフリーリッヒ牧師(Froehlich、内海理事が巻頭言で、日本からヨーロッパにも来て欲しいと感想を書いた研修生)も現れた。彼はその内の1週間で佐渡の山の中にひとり籠って、自炊をしながら瞑想の時間を過ごして、ドイツのつわものとなった。**研修生写真**



(前列 本間あさひ(同志社大生世話係)、ニコラス・ラング(シュトゥットガルト大学)、ペトラ・シュミットクンツ(ベルリン・フンボルト大学)、

後列 マルクス・

(2009年度：ドイツからの研修生5名と2人の関係者)

オーバーロイター(ミュンヘン大学)、クリスチアーネ・バンゼ(随行研究者)、ヨナス・フランク(ニュールンベルク大学)、クリストフ・クレマー(ハイデルベルク大学)

財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッション京都宗教学際研究所

東京事務所：〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41 富坂キリスト教センター2号館

Tel/Fax03-3812-2072

京都事務所：〒606-8726 京都市左京区北白川別当町 35

Tel/fax075-723-4400

No.1. 2009.12.18.